

SHIMANTOGAWA MONOGATARI

2021.1.25
Vol.291

四万十川流域でテナガエビ養殖に挑む。 松下商店



テナガエビ養殖施設の前で（左：正岡千沙さん、右：松下昇平さん）

清流通信をご愛読いただきありがとうございます。今回は、川エビの種苗量産に成功した松下商店（中土佐町大野見）の取り組みについて紹介します。年々減少する川エビ資源の期待の星に迫ってみました！

■四万十川の大ニュース！

「テナガエビ養殖量産成功」！？

悠々と流れる四万十川も上流へ行くと表情が変わり、川幅も狭くなっていく。なんとも親近感のわく細い四万十川に出会えるのは中土佐町大野見地区のあたりからだろう。この大野見地区には四万十川最上流の沈下橋（高樋沈下橋）があるが、その一つ下にある久万秋沈下橋の近くが今回の舞台である。

久万秋沈下橋を渡るとすぐに大きなハウスが見える。以前見かけたときは大きく「あゆの種苗センター」という看板が掲げられていたのが印象的だった。しかし、今は、違うらしい。昨年（2020年）の9月、四万十川に大ニュースが飛び込んできた。「テナガエビ養殖 量産成功 中土佐町『国内初』事業化（2020.9.19 高知新聞）」。この大きなハウスの中では、とんでもないことが起きていたようだ。

■「あゆ」から「川エビ」へ

このハウスが「あゆ」から「川エビ」になったのは、約7年前のことだった。旧大野見村で、種苗鮎生産プロジェクトが行われるために今のハウスが建てられたのだが、鮎の冷水病発生などで大量死し、遊休施設となっていた。その後、このままではもったいないと様々な利用が考えられたが、そこで、出てきたのが「川エビ」だった。

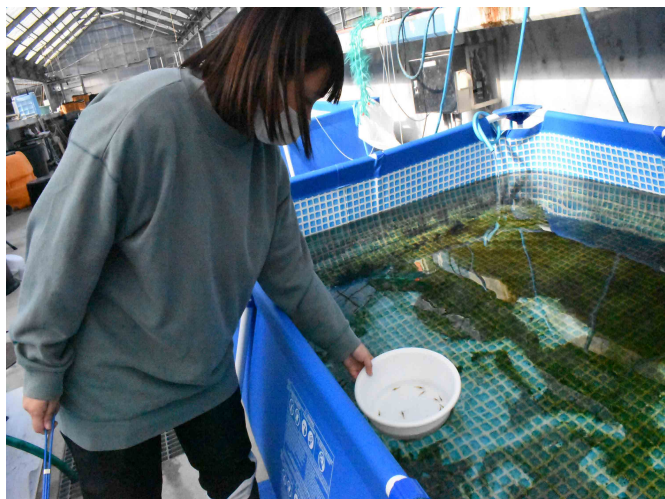
近畿大学水産学科で養殖を学んだ経験のある町職員市川文啓さんの発案らしい。四万十の水を作り地域貢献事業を行っていた株式会社マキテックと施設の有効活用について検討するなかで、四万十川在来で、テナガエビは今まで国内の事例も少なく面白いのではないかとテナガエビ養殖事業をスタートした。5年間の契約の中で、株式会社マキテックは完全養殖に成功しながらも量産が課題となっていたが、契約期限が切れるときに現施設を使用しての事業継続を断念することを決めたのだった。

■ターキーと川エビ

そこで、2019年の10月、松下商店の登場である。松下商店の代表松下昇平さんは、しまんとターキーを生産する大野見七面鳥生産組合の組合長であり、同商店でターキーの販売を主に行っている。この現在の松下商店を起業するタイミングでテナガエビ養殖の話をもらった。松下さんは、市川さんとテナガエビ養殖事業について話す中で、大野見の振興のためにも、そして何よりも面白そうだと思うテナガエビ事業に着手することを決めた。

＊松下さんの熱い想いについて、今回書ききれないが、清流通信 266 章四万十産「しまんとターキー」で紹介しているのでぜひ見てほしい。

<http://www.shimanto.or.jp/17wp/wp-content/uploads/2018/12/266.pdf>



テナガエビをたらいに入れてくれる正岡さん

■川エビを知らなかった養殖部長

2020年4月、株式会社マキテックから松下商店に事業が移った。その時、テナガエビと一緒に松下商店にやってきたのが、正岡千沙さんだ。

現在、テナガエビ類養殖事業部長としてテナガエビの養殖を一手に引き受け、松下代表も「エビのことは全部任せます！」と信頼を寄せている。

テナガエビ養殖の中心として事業を引っ張る正岡さんが、3年前はテナガエビの存在さえ知らなかったという。大野見出身で工業高校を卒業し鉄鋼製造の仕事をしていたが、退職し地元に戻っていたところ、市川さんのスカウトを受けた。

大野見では、テナガエビの生息がないため全く馴染みがなくテナガエビって何？という状態。生物学や養殖、水産業などは全くの無縁だった。「市川さんは昔から知ってるし、1年くらいならやってみようと思って始めたんですが・・・いつの間にかこうなっていました。」と当時のことを語る。

市川さんの指導を受けながらテナガエビと日々格闘してきた3年だった。今やっとやりがいを感じているようだ。正岡さんは現在22歳。昨年は高知大学にも勉強に行き、もっと学びたいことも増えた。こういった事業は専門性が強く別業種からの参入は異例だが、正岡さんの仕事に対する率直な姿勢と市川さんの想いが現在の状態まで押し上げたのだろう。



丁寧に育てられたテナガエビ。出荷サイズはこれよりも大きいサイズ。

■世界初のテナガエビ養殖！

全国から大注目

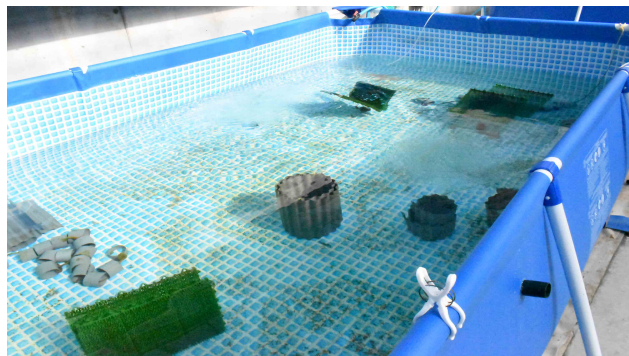
川エビと言っても多種多様で、松下商店では、テナガエビの中でも「ミナミテナガエビ」を取り扱っている。現在、ミナミテナガエビの種苗として 11 万尾確保できた。

昨年の報道以降、主力のターキーよりもテナガエビの問い合わせが多い。その内容はテナガエビの注文よりも、全国から川エビ養殖を行いたいという相談が多いようだ。

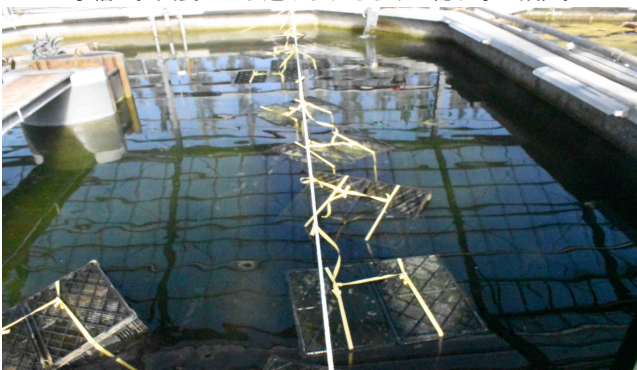
というのも、テナガエビの養殖に関しては先進事例も文献もほとんどない。7 年前に手探りで始め、日本初ましてや世界初といわれる今の結果となっているため、業界では快挙なのである。川エビ資源も四万十川に限らず全国で減少の一途。様々な方面から羨望のまなざしが強いことは間違いない。



淡水に馴れたエビを目的の大きさまで育てる



サイズ別に選別したときに尾数が少なかったサイズを小型水槽へ。共食いから逃げられるように隠れ家を設置。



100 t の水槽を 3 つ使用中。その水槽内の様子。黒いかごの中にサイズ別にエビが入っている。

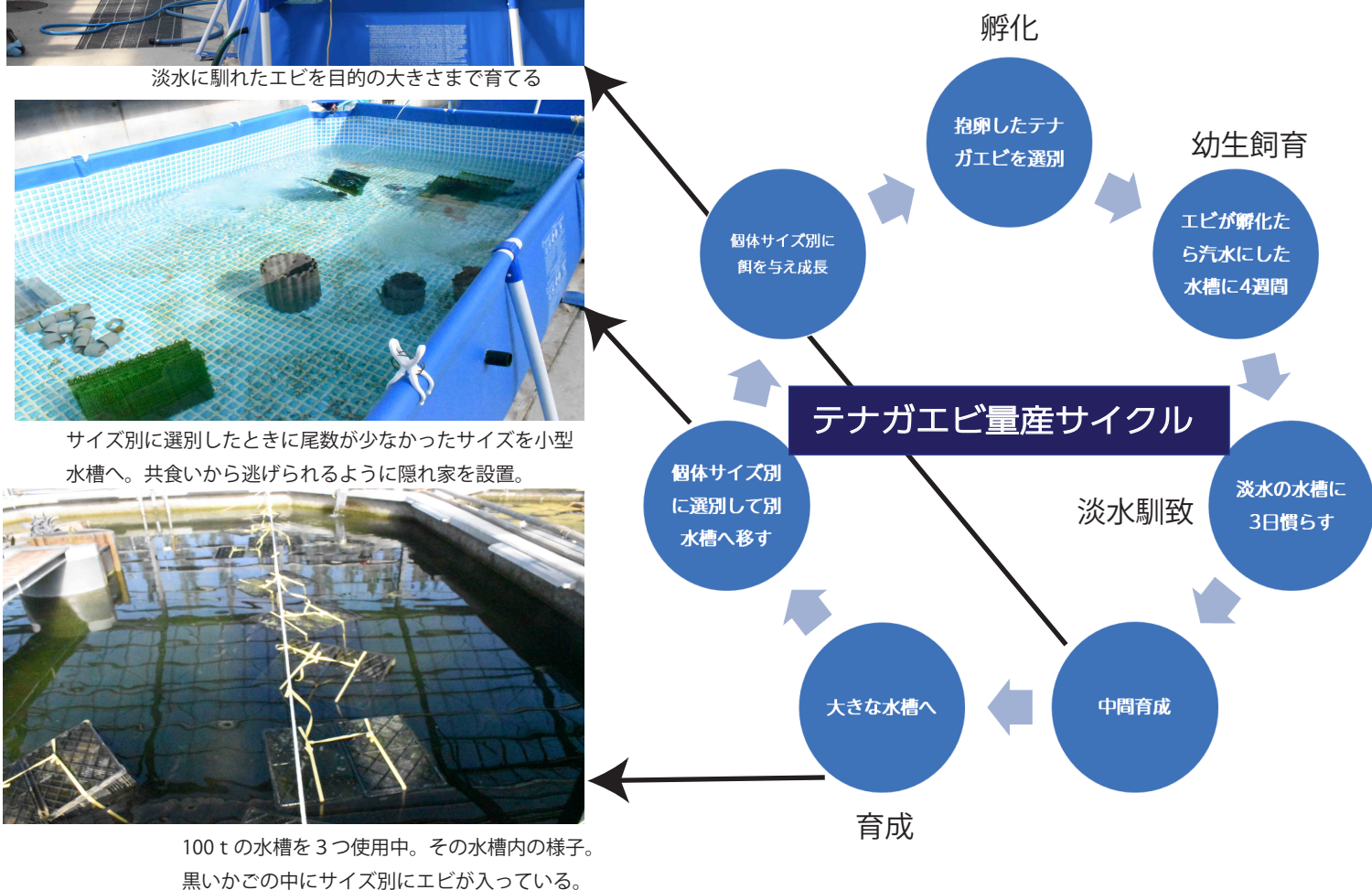
■川エビをいかに生かすか。

闘いの日々を超えて、あと一歩

良いことばかりではない。この事業の一番の課題は、テナガエビを死なせないことだという。養殖業として当たり前なのだが、テナガエビは共食いが非常に多い。また、環境変化にも弱く死にやすい。丁寧に育ててきたテナガエビたちが本当にたくさん死んでしまう。それをどうにか食い止めるために、工夫を凝らす毎日だった。

一尾ずつサイズ別に選別し（大きい個体は小さい個体を食べてしまうため）、抱卵した個体を選別、孵化したゾエアの塩分濃度の調整、サイズ別に餌を変え、水温の調整のため注水量を見極める。それでも、ちょっとした水温の違いでテナガエビが大量に死んだこともあった。共食いが止まらず 1 割も生存できないこともあった。特に、夏は繁殖期でゾエアが大量に孵化するため、少ない人数で休みもなく働くこともしばしばで非常にきつかったという。そんな多くの課題を乗り越えて、やっと稚エビ量産までたどり着いた。

ここまでくると、販売開始まであと一歩だ。その前に地元大野見の人たちへ試食会を行い、今年の 4 月以降に販売を開始したいと意気込む。



■四万十川からの期待

川エビは四万十川にとって重要な資源である。四万十川の文化のそこので登場し、観光資源としても内外から愛されている。しかし、いま現在川エビの資源減少が著しく、高知県では2018年から禁漁期を設け資源回復を計っている。

四万十川にとって、この取り組みは大きな希望につながるかもしれない。松下商店も「四万十川にとって必要な事業で、ゆくゆくは川エビの資源増大に貢献できれば本望だ。」と意気込んでいる。そのためには、養殖業として一本立ちできるような体制を作っていかなければならない。まだ課題も多く、技術面でのサポートなど他企業との連携も必要だ。

まだ始まったばかり。しかし、誰も踏み込んでいない領域へ自ら道を生み出し進み続ける姿がかっこいい。ワクワクする。このテナガエビに立ち向かう松下商店の動きに注目しながら、私たちも全面的に応援していきたい。



テナガエビ養殖施設内

・松下商店

高岡郡中土佐町大野見奈路 105

H P : <https://matsushita-company.jp/>



テナガエビ養殖施設外観。ここに近々「川エビ種苗センター」と大きな看板が掲げられるだろう。

編集後記：このテナガエビの養殖量産成功というニュースは四万十川流域ではかなり話題になった印象だ。これは詳しく知りたい、応援したいと言う思いから今回の記事になった。取材で驚いたのは、松下商店のお二人の若さと熱量だ！四万十川流域も高齢化と嘆くのではなく、このような若い力を発信し応援していきたいと心から思う。（丸石）